

～あした、転機になあれ！～

美し島から... 哲楽さびら。

職場を元気にする哲楽レシビ その二十

「ハラスメント」を哲楽すると...

心にゆとりがないから
生まれるハラスメント

沖縄では梅雨明けがそろそろ...という時期に、世間の注目を集めたのが、都議会で男性議員から女性議員に浴びせられた発言。私は、ある地元企業から依頼された、男女共同参画型の職場作りに関する研修の準備を始めていたところだったので、また一つ、題材が増えたと思えました。

「早く結婚しなさい！」

20代半ばから研修講師をしてきた私は自分自身、この乱暴な「アドバースメント」(嫌がらせ)を体験してきました。特に多かったのがいわゆるセクハラで、例えばリーダー研修では、女性参加者に出会えるのが10人に一人くらい。受講者全員が男性で、女性は講師の私一人という状況もめずらしくありません。そういう中でしばしば、セクハラ的な言動が...

どうしたら、セクハラはなくなるのか？これは研修のテーマにもしてきたし、実際に職場のリーダーからの相談を受け、被害者・加害者双方の話の聞きに行き、解決策を一緒に考えて考えたこともありました。悪意があったケース、セクハラの知識不足が原因のケース、アルコールの勢いで発生したケースなど、セクハラが起こった理由はさまざま。

私が20代に経験した忘れられない一例は、講演終了後に参加した懇親会で、席が見当たらず困っていたときのこと。ある男性の社長から「こっちへどうぞ」と手招きされたので、行ってみると...そこにあつたのは、その男性の膝だったのです！

また、講演会で「若いねえちゃんか」とあからさまにガツカリされたことも。喜怒哀楽の中で、「怒」の出番が多かった当時の私は、いつも「早く30歳になりたい」と思っていました。そうしたら、「ねえちゃん」という呼び名からきつと解放されるから。

そのため、あのころは髪を短く切り、意識的に黒や紺のスーツを着用。さらには小柄なので、少しでも大人の女性として見られるよう、ヒールのある靴を履くなどして、私なりに精一杯の武装をして頑張っていた時代でした。

そんな時代を経て、自分らしさを心から楽しめるようになった今の私は、男女共同参画というテーマで、さまざまな職場から指名をいただくようになりました。それまでは心にチクリと残る思い出だった戦いの数々が、「ぜび、職場で話してほしい！」とリクエストされる話題に。では、セクハラ、ハラスメントと向き合ううえで、一番大事なことは何？

さまざまな方々と哲楽を重ねる中で、私がたどりの着いた答えは...「必

要なのは幸せ感」ということでした。

セクハラ、ハラスメントのほとんどが、当事者の心に「ゆとり」が足りないがゆえに起こったものであることがわかってきたのです。ゆとりがないため、頭でわかっている、やさしくなれない。相手の立場で考えられない。そして、つい、トゲトゲのボールを投げてしまうのです。

そういう人たちの場合、いくらハラスメント防止の研修をしても、改善は難しい。逆に、心にゆとりがある人は、研修を受けなくても大丈夫！これが、私の哲楽です。

大切なのは 今を楽しむ気持ち

そして、心にゆとりを生むのは、今を「楽しいなあ」「幸せ！」と思える気持ち。そうすれば、心だけでなく、言葉にも、表情にも、きつとゆとりが生まれるはずなのです。

ゆとりを持てれば、笑顔度はもちろん、気づき度も、さらには想像力や発想力も高まるはず。ひいては、職場のコミュニケーションが活発になり、チーム力も高まり、ミスやクレームも減ることを、私は現場の皆さんに教えてもらいました。

相手を思いやるだけの心のゆとりを、皆さんは、どれほど持っていますか？特に接客業の場合、心のゆ

とりは、お客さまとのコミュニケーション能力のアップやクレームの予防にもつながっていくはずですよ。

知識や技術といった枝葉ではなく、「ゆとり」という心の根っこに目を向ける。これが紀々オススメの、男女共同参画社会実現のキーワードであり、ハラスメント対策案。私たちが思っているより、ハラスメント問題解決のカギは、きつとシンプルなものなのだと思います。

あした...転機に、なあれ！

あしたの今、
「あわせ度」は
どのくらいですか？



紀々(きき)

哲楽家。那覇市出身。1998年に早稲田大学第一文学部哲学科東洋哲学専修を卒業。「自ら考え、自ら動く力を磨く社員研修」との依頼を受け、「哲楽のチカラを、笑顔のチカラに」をテーマに、さまざまな企業現場でサポートを行っている。特に「若手リーダー・女性スタッフがイキイキ元気に働ける職場づくり」を哲楽する研修は、好評。現在は、沖縄の表現で「Let's 哲楽」を意味する「哲楽さびら。」を合言葉に、沖縄発で職場に哲楽習慣・風土を広めるべく活動を展開中。